

歴史資料館だより

聖隷福祉事業団特別展 隣人愛の系譜

社会福祉法人 聖隷福祉事業団理事長 山本 敏博

聖隷歴史資料館の七回目の特別展として、聖隷福祉事業団が担当させて頂くこととなりました。七〇年余の歴史の中で育まれた事業は医療サービス、保健サービス、福祉サービス、介護サービスに及び、それぞれの事業は各々の発展経過を辿りながらも、互いに連携し連帯しながら歩んでいます。既に聖隷福祉事業団の事業は八四施設、一八三事業を運営し、八〇〇〇名を超える職員が働く集団にまで成長しました。一つ一つの事業がその使命と事業理念を確認すること、職員の一人一人がやりがいと仕事を通して自己成長、自己実現できるために、常に自らの事業を振り返り、先輩たちが築かれた歴史に学ぶことは大切なことであると思っています。その意味でこの歴史資料館特別展の機会を頂いたことは、職員にとっても事業団にとっても意義のあることであり、多くのことを学ばせて頂く機会であると思っています。聖隷の事業は、困難を持った一人



の結核患者さんをお世話させて頂くことから始められています。このことは私たちの仕事の基本は常に一人の助けを求める方に視点を注ぐことが出発点であることを示しています。聖隷の事業が大きくなり、多くの方を対象としながらも、私たちの仕事は常に一人の方の幸福のために捧げられねばならないと思っています。今、支援を必要とされる方に私たちが出来る最高最上のサービス（奉仕）を行うことが出来るために、職員は技術知識を磨く努力を惜しまず、実現困難と思われた事業にも取り組んできた歴史が、私たちの誇りであり、財産なのです。前回の遠州栄光教会

発行者 聖隷歴史資料館

〒四三三-八五五八
浜松市三方原町三四五三
聖隷クリストファー大学二号館二階
TEL 〇五三(四三九)三四〇七
FAX 〇五三(四三九)三三四七

の展示テーマ「見えるものは見えな

いものから」になぞらえば、聖隷福祉事業団は「目に見えないものを見るものにしていく」という役割を担っているのだと思います。真に必要とされる事業が行われ、その結果として複数、多岐に亘る事業の一つ一つが生まれたことがその証です。

私は昭和四三年に聖隷の一員となり、聖隷の歴史に携わらせて頂きました。聖隷浜松病院での勤務を通して日本の医療の大きな変化を目の当たりにしました。聖隷の医療は未熟児センターやホスピスの開設等、運営困難と思われた事業への取り組みが行われました。今や聖隷の医療は病院評価でも高い評価を頂く最先端の高度医療が行われています。現在建設中の聖隷三方原病院新館はヘリポートを含む救命救急医療や防災拠点としての機能充実が図られようとしています。また、聖隷浜松病院では癌の早期発見を行う最新医療としてPETセンターが建設中です。これらはやがて聖隷の歴史を刻む大切な事業となっていくことでしょう。全てを紹介することは紙面の都合上、出来ませんが、他にも保健事業、介護・福祉事業等、聖隷の事業は時代の要請を受けてますます広がっています。

ます。近年は他の地域でも協力が求められるようになっていきます。職員が心をひとつにして事業に取り組むための手法としての組織管理も必要となります。目標管理活動にも取り組んでいます。

創立七〇年を機に聖隷の基本精神「キリスト教精神による隣人愛」も改めて掲げ、職員一人一人、事業の一つ一つが基本精神から外れることなく、地域福祉に貢献できることを願いました。聖隷が築いてきた歴史の豊かさに学びつつ、その中から将来に向けたビジョンを作り出したいと考えたからです。これを踏まえながら今回の特別展には各事業毎に歴史とその使命を紹介しています。先輩たちが築かれた深い部分に十分踏み込んだものとは言えませんが、聖隷が取り組むべき仕事とは何かを大いに学ばせて頂いたと思っています。資料の編纂にあたり、貴重な資料を提供して下さい下さった方々、貴重な意見や情報をお寄せ頂いた方々、ご尽力下さった関係者の方々に深く感謝申し上げます。歴史を振り返ることは単に歴史を学ぶことに留まらず、将来に向けた豊かな視点を養うことでもあります。改めて聖隷の歴史を作ってきた先達の方々の働きに敬意を表したいと思います。そして、聖隷の事業の原点を忘れることなく、私たちは自分たちの出来る精一杯の仕事をして、この時代に行っていきたいと思っています。

見えるものは見えないものを

日本基督教団遠州栄光教会 主任担任牧師 森田恭一郎

「もし私があなただを洗わないなら、あなたは私と何の関わりもないことになる」(ヨハネ福音書一三章八節)

主イエスは弟子たちたちの足をお洗いにした。そして、主イエスとの関わりを持つことをお求めになられた。主イエスは、このとき弟子たちの足を洗わなくても、十字架において罪を贖う程に私たちと関わっておられる。しかしそのことを弟子たちは気づかない。そのことに気付くようにと主イエスは弟子たちの足をお洗いにし、弟子たちが主イエスと関わるようにとお求めになられた。

主イエスは弟子たちの足をお洗いにした時、たらいと手ぬぐいを用いられた。聖隷のシンボルマークの外側の二重円はこのたらいを表現している。聖隷のシンボルマークは、主イエスが弟子たちの足をお洗いになつて仕えて下さったこと、もう一つ、主イエスとの関わりを弟子たちが持つように求められていることを象徴している。

以前、ある学生がボランティアに



来て草取りをしていた時のことである。宮崎洋先生がその学生にこう語られた。「直接、利用者さんに関わらない仕事でも、利用者さんのための仕事であって、利用者さんお一人おひとりにお伝えしているのと同じですよ」。私たちには、対人関係、対事(事柄)関係、対物関係があるが、先生の言葉は、聖隷の仕事は全て、利用者へとつながっていることを教えてくれている。

対人関係は人格と人格の出会いである。聖隷福祉事業団の歴史が、その始まりの部分で桑原昇次郎青年の名前を記憶していることは意義深い。一結核患者にただ対応したのではなく、長谷川保が桑原青年と人格的な出会いをし、桑原青年も長谷川保と人格的に出会ったのである。さらに、

御言によってキリストと出会ったのである。病は治らなくても「健康に病む」人生を生き、天を見上げつつ地上の生涯を終えたのである。桑原青年は利用者の立場から聖隷の歴史を作った最初の人である。

看病の業も愛であるが、行為を通しての相手を思う人格的な関わり、人格的な出会いも愛である。当初は患者中心という言葉もない程に一緒に生活だったとのこと。その後状況は変化しても今もなお、職員が利用者お一人おひとりの名前を記憶に留める程に利用者に関わって下さることとは貴重で感謝すべきことだ。

パウロは「目が手に向かって『お前は要らない』とは言えません。それどころか、体の中で他よりも弱く見える部分がかえって必要なのです。神は見劣りのする部分を一層引き立たせて、体を組み立てられました」(1コリント二二章)と語った。思えば人間はみな弱いもの。そのような私たちを神様は「お前は要らない」とは仰らない。この御心を分かち合うようにして、お互い全てを受け入れ互いを励ましながら困難を克服し、聖隷は歴史を作り上げてきた。この営みがキリストのお姿と重なる。

教会特別展示では「見えるものは見えないものから」の標題の下に、遠州栄光教会の(時に混乱も抱えた)

歴史の見える営みの背後に、キリストの「見えない関わりがあったこと」に思いを向けた。それが教会と聖隷での営みに刻まれるようにしてあったと信じる。

この度、聖隷福祉事業団の特別展示開始に際し、加えてこう表現してみたい。「見えるものは見えないものを」。事業団の理念は「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」(マタイ福音書二二・三九他、口語訳)。神がこの私たちを愛し私たちに関わって下さる。そのようにあなたの隣人を愛しなさい、ということである。それは一方において「見える人間の業は見えない神の愛から」であるが、他方「見える聖隷の業は見えない神の愛を映し出す」ということでもある。聖隷は先見的、先駆的、開拓的、即応的な独自の見える業と共に、見えない神の愛を映し出す所に、その固有性がある。これからもキリストが、聖隷の営みと、職員も利用者もお一人おひとりとを、ご自身の愛を指し示すものとして下さる、と信じる。

そのために、キリストは「私と関わるように」と聖隷を招いて下さる。教会もまた、キリストの御業の成る所として聖隷に関わり、神の御業にお仕えしていきたい。困難の中にあっても、どなたとも共に天を見上げ、皆様の励みになりたい。

「聖隷」の理念は変わることはなく、揺るがない

聖隷福祉事業団特別展準備委員 ころのとり保育園園長 内藤かず子



私に聖隷福祉事業団（以下事業団）の特別展準備委員のお話を頂いたとき、果たして私がお役に立てるのだろうかという不安がありました。なぜなら私の仕事の保育園事業は、事業団の中では、医療事業や保健事業はもとより、福祉事業においても今までは高齢者関係が主であり保育園事業は、良くも悪くも「わが道を歩む」といった感じの存在であり、事業団に三〇余年も勤めながらも恥ずかしいことに保育園事業以外の事業団のことはあまりよく知らない、解らないというのが正直なところでした。そのように思いながらも、お引き受けしたのは、これを機会に事業団のことを私なりに少しでも知ることが出来るよい機会になるのではないかと考えたからです。

一人の結核患者を、キリスト教を信じる青年たちがケアすることから出発した「聖隷」（聖なるものの奴隷となつてはたらく）の事業は今や日本で最大規模の社会福祉法人となり、多くの施設を抱え、その事業内容も多岐にわたっていることを、私が特別展準備委員として関わり改めて知ったと同様に、この特別展をご覧になった方々にもきつと知っていただくことになるでしょう。

また、そのあゆみは常に時代の中で、人々が必要としているニーズに事業団が応えてきたことの結果であることがお分かりいただけるのではないのでしょうか。

『人々のニーズに答える』は、現代社会では、事業団に限らずあらゆる事業のキーワードのような響きがあります。事業団は、もしそのような事業と同じ視点にたつて『人々のニーズに答える』のであれば「聖隷」でなくともよいような気がします。

特別展の準備をしながら、事業団のあゆみを振り返ってみると、このようにしてここまでこられたのも「聖隷」であったからだと思うから

です。これからも事業団が「聖隷」であるためには、基本理念である聖書の「自分を愛するようにあなたの隣人を愛しなさい」の意味を、今一度、職員一人ひとりがしっかりと噛み締めなくてはいけない、と思います。

理念はこれからも変わることとはなく、揺るがないものです。それを複雑な現代社会においてどのように継承していくのか、日本で最大規模の社会福祉法人になった今、事業団にとっては大きい課題であることも、この特別展を準備するうちにみえてきました。

聖書はクリスチャンだけのものではありません。聖隷福祉事業団のテキストブックであってもよいのではないのでしょうか。そのためにはもつと職員一人ひとりが聖書の中身を知らないといけません。「聖隷」の事業は今までも、そしてこれからも聖書の中にあるのですから。

特別展準備委員として事業団の歴史に触れながら、「聖隷」が私の中であぶりだされたようです。よい機会が与えられました。感謝します。



◆刊行物のご案内

長谷川八重子記念誌

星空を道として編集委員会編集発行

「星空を道として」

「星空を道として」は一九九六年三月に公刊されました。長谷川八重子召天一年を記念して、生前、長谷川保・八重子夫妻が行った講演の中から五篇をまとめた講演集となっています。

「星空を道として」というタイトルは遠州教会三方原枝教会の時代、長谷川八重子氏が一九七三年六月三日から六月十七日の三回にわたり教会の週報に一九四〇～一九五〇年ごろのことを振り返り寄稿した原稿のタイトルに付されたものです。聖隷保養農園（当時）が長い療養生活を必要とした結核患者を看取るために、よき医者、よき看護人、多くの人を擁し、借金できるところからはみな借りてもうどこにも貸してもらえるところはないという窮乏を極めた中、一週間後に一五〇円の手形を落とさなければ、信用を失って潰れてしまう。急性腎炎に倒れた長谷川保を残して一人、伊豆の知人、東京の賀川豊彦などを訪ねるも、みな断わられ、いよいよ最後かと水だけを飲みながら浜松に戻って来た時の様子が、信仰告白そのもののように生き生きと記されているものです。在庫僅少につき頒布することはできませんが、いずれ再版を望みたい一冊です。

長谷川 保と聖書 4

長谷川保の信仰生活

前 聖隷学園宗主任 佐柳 文男

「夜もひるのよう」に輝く」

詩編一三九編一二節

桑原昇次郎の父親が昇次郎の記念碑に刻む聖句を長谷川保に求めた。長谷川保は詩編一三九編から「夜もひるのごとくに輝けり」を選んだ。

この聖句は彼の自伝的小説のタイトルにも用いられた。その書の冒頭にこの詩編の前半が掲げられている。長谷川保はこの詩編のうちに自分の信仰と神学思想の核心を見出した。

「夜もひるのよう」に輝く」という。詩人は自然現象について語っている。ではない。人の生を語っている。人生を四季にたとえることもある。人生の様々な局面を「夜」や「ひる」にたとえることも可能である。「ひる」とは若さと健康に恵まれ、富と栄誉に輝く人生のことである。明るい希望に溢れ、生きがいを感じている状況を指す。逆に「夜」とは希望が失われ、生きがい失われて、悩みと苦しみに満ちた状態を指す。そこに人生の終焉、魂の滅亡を見る。

「命の光」(ヨブ記三三・三〇参照)の失われた状態を指す。老いること、障碍を持つこと、難病や死病に苦しむこと、貧しさのうちにいることなどが「夜」とされる。一般に人は「夜」を忌避し、「ひる」を願い求める。真昼のように輝く人々を持てはやし、失意の闇に閉ざされた人々を忌避し排除する。

聖書にそのような考え方はない。「夕暮れになっても光がある。」「闇の中でも主はわたしを見ておられる。夜も光がわたしを照らし出す。」「起きよ、光を放て。あなたを照らす光は昇り／主の栄光はあなたの上に輝く。見よ、闇は地を覆い／暗黒が国々を包んでいる。しかし、あなたの上には主が輝き出で／主の栄光があるたの上に現れる」(イザヤ書六〇章一、二節)。救いは「ひる」にしかないのではない。「夜」も神の支配のもとにあり、救いがある。神谷美恵子著『生きがいについて』も、人の「生きがいをうばい去るもの」の中で最も深刻なものは難病や死病ではなく、仕事の失敗でもなく、人が犯す罪であることを明らかにしている。

長谷川保の人生はイエス・キリストによる救いの体験を絶対的出发点とする。長谷川保はイエス・キリストとの出会いによって神に愛され、罪を赦されている自分を見出した。彼は海外に雄飛して富と栄誉を求めようとした。そこに救いを見ていた。

しかしイエス・キリストとの出会いを通して、「夜」を忌避することをやめた。神を愛し、神に対する絶対的信頼を寄せることになった。この信頼・信仰を愛の実践によって神への感謝を表し、夜の闇のうちに生きる人々の福祉の実現に向けて働くことが彼の人生のすべてとなった。結核を患い、死に直面している人々すべてが、一瞬でも生きていて幸せであると感ぜてもらえるように働くことが長谷川保の信仰生活であった。

長谷川保は神学的基盤をカルヴァンやアブラハム・カイパーから学んだ。宗教は文化を形成する。カイパーはカルヴィニズムが近代市民社会の文化を形成してきた次第を詳説している。社会福祉が確立するためにはそれなりの文化的基盤が必要である。長谷川保はカルヴィニズムによる日本文化の変革を夢見た。日本の文化的風土は在来の宗教によって形成されている。そこに社会福祉の健全な成長は見られなかった。隣人愛の育つ土壌がなかった。日本に社会福祉が発展するためには、カルヴィニズ

ムによる文化改革が必要である。

長谷川保はルターからは「尊いのは愛によって働く信仰」である所以を学んだ。隣人愛の実践こそが信仰生活のすべてであることを学んだ。マタイによる福音書一〇章七節以下にあるイエス・キリストの言葉に従い、自ら貧しくなることを厭わなかった。病む人々を忌避し、排除することをしなかった。彼が尊敬したアッシジのフランチェスコも同じ聖句を聞いて人生の再出発をはかり、清貧と清潔と従順の人生に踏み出した。それによってヨーロッパ社会に社会福祉の基盤を確立した。長谷川保はヨハネの手紙一第三章一六節に従い、結核を病む人々に仕えて野垂れ死にすることを理想とした。

詩編一三九編にこれらの考え方が凝縮されている。人生のすべてが神の尊い御計らいのうちにあることを高らかに謳いあげている。難病や死病に苦しむ人々が「私は幸せ者である」と告白することができる。長谷川保はそのために生きた。

